

第 22 回

日赤宮城県支部での赤十字奉仕団活動等 ～東日本大震災での活動報告と今後の課題～

井上 嘉秀（日本赤十字社宮城県支部

組織振興課 奉仕係長） 平成 24 年 9 月 8 日



東日本大震災での活動報告と今後の課題

早川 皆さま、こんばんは。時間になりましたので、ただいまより第 22 回名田庄多聞の会を開催致します。ようこそお集まりくださいました。本日の講師は宮城県から来ていただきました。今年の 2 月の名田庄多聞の会で、今日来ていただいた日本赤十字社福井支部の山本さんからお話を伺いましたが、山本さんを通してどなたか東日本大震災のとき活動された方を紹介いただけないかとお願いしたところ、本日の講師の井上さんを紹介していただいた次第です。山本さんのお話はボランティアに行ったほうの話だったのですが、今日は受け入れたほうの方のお話になるかと思えます。井上さんは、先ほど話を伺ったところ、ご自分も被災されたそうで、名取市にお住まいとのことですが、今日は悲しい話もあるかと思えます。どうかよろしく願いたします。

赤十字奉仕団

井上 皆さま、こんばんは。日本赤十字社宮城県支部の組織振興課に勤務しています井上と申します。よろしく願います。先ほど早川さんから話もありましたが、今回の震災では各地の方からご協力をいただきました。前回の山本課長の話は医療活動とかそういうお話しだっただけですが、今日は私のほうからあまりメディア等で取り上げられる機会が少ない赤十字奉仕団、ボランティア活動に焦点を当て

てお話ししたいと思います。こういう機会を作っていただき本当にありがたいと思っています。

私、福井のほうに寄せてもらったのは初めてでございます。こちらに來たら山があつて自然がとてもきれいで、実は私の田舎も山深いところでありまして、ほぼ同じような環境のところですよ。

日本赤十字社宮城県支部は職員が17名規模で、そういうところに全国から赤十字関係者とボランティアの方が集まつてくださいました。かたでした。私、就職しましたのが平成7年で、仙台赤十字病院で4年間勤務しました。病院には特殊な課がありまして、皆様方の中で病院にお勤めのかたがいらっしゃればお分かりになると思いますが、医事課というのがあつてそこに4年間いました。その後、支部のほうの事業推進課に移り、救急法の講習などを担当して、その後平成17年より宮城県赤十字血液センターで4年間、平成21年からは宮城県支部に戻り、現在に至っています。

震災の状況

宮城県にお越しいただいたかたはいらっしゃいますか(手をあげる)。
ああ、けっこういらつしゃいますね。仙台市は宮城野区、若林区、これらが沿岸部です。あと、泉区、青葉区、太白区で、ここが私の住んでいる名取市です。皆さんご存じの通り、沿岸はほとんどが津波の被害にあつています。宮城県で一番震度の大きかったのは上の方のこの辺です

ね。県北部です(スライドに宮城県下の震度の図。震度7(栗原市)※ 今回の国内最大震度と説明がある)。このスライドは被害状況を示したのですが、この図では溺死、津波で命を失ったかたが全体の92%とあります。ほとんどが津波によるものです。避難されている方は32万人くらいでしたが、9ヶ月後の昨年12月には宮城県内の全ての避難所が閉鎖されました。この図は浸水の状況です。沿岸のところはほとんど浸水、かなり内陸のほうまで浸水しています。

過去の大震災との比較ですが、被害対象地域が1道1都20県とかなり広い範囲にわたる被害であつたことは過去に類を見ないことです。この写真は私ども宮城支部の震災時の状況です。仙台駅から10分くらいのところは北仙台というところがありまして、その合同庁舎の8階に宮城県支部を間借りしております。全国でもこのように間借りしている支部は少なく、普通は独立の庁舎があるのですが、この8階で会議をしていました。緊急地震情報が流れて、隣の部屋から戻ってきましたが、そのとき、机の下にいた女性が机が動いてその下から「きゃー」と出てきた。自分はかなり横に振られ、女性職員に書棚が倒れぬよう支えるのが精一杯でした。

宮城県災害対策本部と同じフロアーに日赤の災害対策本部

夜の12時頃には号庁の電源もなくなつてしまい、あまりしない形なのですが、県庁2階の講堂に災害対策本を作ろうということで、私が行

って何百人いる中でこの人なら聞いてくれそうな人に「日赤なので、対策本部を作らせてくれ」と頼み日赤の活動が始まったのです。

食べるものもほとんどなかったのですけれど、隣の山形県からお弁当とかパンとか持ってきて来てくださって、それらを食べて毎日活動していました。燃料のほうも活動するに従ってだんだんなくなってくるので、本社からもらったり、目の前に契約しているスタンドがあったので、優先的に入れてもらえたのですが、皆さま、多分、メディアを通じてご覧になったように、ガソリンスタンドの前はものすごい渋滞だったので、そこに行つて、一般の皆さまがならんでいる中で、日赤だから入れてくれとはできなかつたので、朝早いうちにリヤカーで行つてタンクに入れてもらい、それを運んで車に入れるということをやっていました。

福井県の皆さまは、震災時、スタンドは込んでいたのですか。2、3日ほどは？

(会場から、「あまり込んでいた記憶はありません」)

私どもには燃料は大きな問題でした。

この図は、県庁の2階講堂に設置された宮城県災害対策本部の配置図です。日本赤十字社宮城県支部はここにいました(図に赤字で示されている)。これまで、あまりない形ではあったのですが、このような県の災害対策本部の中に日赤の災害対策本部を作らせてもらったおかげで、すぐに得られなかった情報が隣に行けばもらえるということ、すぐく有益だったと思つています。

石巻医療圏

ご存じの通り、日本赤十字社の救護対応としては、この図にあるように、大きく五つあります。「医療救護」、「救援物資の備蓄と配分」、「血液製剤の供給」、「義援金の受付・配分」、「その他災害救護に必要な業務」です。五つ目は、「こころのケア」「ボランティア活動」等様々な活動を行っております。参考までに作ったスライドですが、「石巻医療圏」はこれくらい広い範囲にあります。旧石巻市と、旧女川町、旧松島町など旧の6町を併せた地域で、人口はだいたい22万人です。この範囲を赤十字が医療対応してくれと、県のほうで調整して決まった。石巻の被害については皆さまご存じと思いますが、三千人以上がお亡くなりになった。ここを赤十字社が医療対応することになったのです。この図の☆印のところが前の、震災前の5年前の、石巻赤十字病院の位置で、現在の、震災時の、石巻赤十字病院はここです。海から直線距離で4キロのところ、この図で赤枠で囲った部分は高くなっているところ、津波の影響を受けなかったところですが、その他は津波の影響を受けるところです。もし石巻病院がこの位置にあったとすれば、病院は水没し、石巻医療圏は成り立たなかった。非常に厳しい状況だったと思います。石巻で残っていたのは、石巻赤十字病院だけで、その他は水没したり機能しなかつたりでした。赤十字病院に患者さんが一斉に搬送されたという状況でした。

赤十字ボランティア活動

ここからは赤十字のボランティア活動についてお話しします。

皆さまの中で赤十字奉仕団についてご存知の方はどれくらいいらっしゃるでしょうか。(会場から手が挙がる)かなりの方がご存知ですね。赤十字奉仕団という組織がありまして、奉仕団には、「地域奉仕団」、「特殊奉仕団」、「青年奉仕団」の三つがあります。宮城県の場合は、地域奉仕団は県内に135団あり、約13,500の方が各地で活動されています。特殊奉仕団は15団、約400人。青年奉仕団は3団、約500人です。奉仕団の活動については、奉仕団規則に定められていて、次の4つがあげられています。

(1)災害救護に関する奉仕、(2)保健衛生等に関する各種事業への奉仕、(3)社会福祉施設及び援護を要する者への奉仕、(4)その他赤十字の理想を達成するために必要な奉仕の4つです。奉仕はどのようにやればいいのですかと問われることがあります、大きな枠で捕らえたととき、人の命を救うとか人間の苦痛を軽減するとかになります。

次に震災当時の各赤十字奉仕団の活動内容について説明します。震災が起きて一年間は各奉仕団の方々から活動内容の報告を受けてきました。この図はそれらを示したものです。

地域奉仕団は、炊出しとか、配食支援、支援物資の配給、あるいは避難所見回り、給水活動など、いろんな内容を展開していただきました。地域奉仕団は先ほどふれましたように135団あるのですが、仙台市

内の地域奉仕団はかなりあって76団という組織になっています。他の支部に行きますと市毎に1団の奉仕団かというところもあるのですが、仙台市の場合、青葉区に20の奉仕団があるとか、太白区の中に30団あるとか、なっています。

こちらが特殊奉仕団と青年奉仕団の組織と活動内容について示したものです。宮城県には特殊奉仕団が15団ございます。アマチュア無線奉仕団だと情報収集とか、看護師奉仕団、これは看護師を引退された方の奉仕団です。避難場での健康診断や相談など。青年奉仕団は、学生ボランティアが中心です。

これらの奉仕団の震災時の活動実績を示したものがこの図です。地域奉仕団については、県内に135団あるうちの78団が活動して、活動人数は延べ人数で8,723名。特殊奉仕団は7団が活動、活動人数は591名、青年奉仕団は活動団数は1で、活動人数は102名でした。平成24年3月31日現在で、総活動人数は9,416名でした。この数が多いかどうかについては、赤十字本社のホームページに載っている各県の状況から言えば、発生県であつても地域でがんばってくださいの方々がおられたと、私は思っています。

平時における奉仕団活動

これは今年(平成24年)の6月下旬に各奉仕団の委員長にお集まりいただいた研修会がございまして、そのときに私は、委員長さんは今回

の震災を経験されてどう思っているのかと思ひ、平時における奉仕団活動に関して、単純な質問ですが「平時に充実した赤十字活動が行えていますか」とアンケートを採ってみました。

結果がこの図ですが、「行えている」と回答されたのが、26人(28.6%)、「行えていない」が、27人(29.7%)、「どちらとも言えない」が、38人(41.7%)でした。「行えていない」と回答された委員長さんのほうが多かったので、まだまだかなと実は思っています。「行えてい」という方がちよつとでも増えれば、というところです。

「どちらとも言えない、行えていないと答えた理由」で一番多いのが、「社資を集める組織としてのみ、活動してきた。赤十字奉仕団としての活動を理解していなかった」というものです。地域ごとの内容になるのですが、奉仕団の方は、宮城県の場合、社資募集のとりまとめをしてもらうことが多いですね。そうすると、それが重要な活動になつていって、それを行つていなければいだろうとずっと思っていたと言われる委員長さんがかなり多かったです。自分の仕事がいろいろあつて奉仕団の仕事ができなかった、といわれる方もいました。あとは、活動資金が不足しているのではないかとのご意見。赤十字奉仕団といつても、そんなに人数が確保できない中で、連携してやるしかなくて、奉仕団として単独でやっていると言われればやっていないよね、というご意見もありました。

東日本大震災の震災時の奉仕団活動

これは東日本大震災の震災の時の奉仕団活動はどうでしたかに回答してもらつた結果です。「行えた」と回答された委員長さんは36人(41%)、「行えなかった」は24人(28%)。この結果については、正直、良かったのかなと思つてます。「行えた」と答えた方は平時の時よりも多かつたので、良かったのかなと。「どちらとも言えない」と「行えなかった」といわれた方も、87人のうち51人と多いですけど、今回の震災は沿岸部だけでなく内陸部も大変な状況だったので、このような回答になつたと思います。どちらとも言えない、行えなかったと答えた理由に人員不足をあげられています。その他に、災害時の奉仕団活動をあまり理解していなかったという理由もありました。地域の自主防災組織として行動したという意見もありました。

実は、私、この奉仕団の係になつたのは昨年の6月からなのです。それまでは社資募集関係の業務を担当していました。震災以降6月から奉仕団の皆さまと一緒に活動するようになりました。それでどういふうにしていけばいいのかなと、方向性と結びつけながら模索しているところです。問題点としては、やはり、研修内容の見直しというのがあります。これまでの奉仕団長さんの研修の中では、社資募集関係の研修が大部分だったので、それで、赤十字奉仕団として、そういう活動以外にいったい何ができるのかを、委員長さんと整理していかなければならないと思つています。それと人員不足への対応です。

奉仕団というと、自分には無理だとかがあると思うのですが、地域の奉仕団組織には登録しないけれど奉仕団の皆さまが大変なときは

自分は協力しますよというような、奉仕団の協力員といった形の何か地域でサポートできるような体制が災害時には必要でないかと思っています。

研修内容の見直しについては、今年度から、社資募集関係の説明をすべて削除しました。奉仕団活動の充実について、委員長さんと一緒にディスカッションして、地域として何ができるのか、ディスカッションしたことを地域に持ち帰ってもらうことにしました。奉仕団の基礎研修会については、宮城県支部では、団員の方にそのときにかかった費用のうち2万円を補助しています。いままでの基礎研修会の中には、救急法の基礎研修会とか、幼児安全法の基礎研修会とかがありました。このような取つきやすい内容のものが多めに入っていました。この基礎研修会では、団員の方が赤十字の活動をするにはどういうことを知っておかなければならないのか、どういう活動すればいいのかな、というそういうような意識付けの研修会なので、救急法等講習会を研修内容に組み入れることは、「本当に、申し訳ないのですが」といつて削除しています。今年度からは、団員の赤十字理解に繋がる内容で研修を実施しています。

人員不足についてですが、地域でしっかりと活動できるようにといつてもなかなか難しい状況もあるので、少ない人数でも活動できる事もありますという事で、活動内容のメニューを提供しています。例えば、「こころのケア活動」等です。

「こころのケア活動」

このスライドがそうですが、宮城県支部独自の活動を平成23年6月18日(土)から、毎週土日なんですけれど、「こころのケア活動」ということで、看護奉仕団、安全奉仕団、青年奉仕団員及び宮城県臨床心理士会員のメンバーが、10名程度ですが、避難所を訪ねて活動しています。「こころのケア」と聞くと、みなさん、そんな難しいこと自分にはできないと思われるかも知れませんが、難しいことではなくて、避難所に行つて避難された方のそばにいてあげる、向こうから話しかけてきたらそうですねとその方の声を熱心に聞いてあげる、その人の身になって感じる、そして何かできることがあればしますよと。そういうことを行つてきました。

「こころのケア」という言葉についてはみなさんご存じだと思いますが、この東日本大震災で、ここ福井にお住まいの皆さまもかなりのストレスを持つておられると思うのですね。例えば、私の家では父親は震災の映像をいまだに見ないので、ニュースなど見たくないなど。本なら伏せてしまうとか。石巻などの地域ではそういうのがしっかり残っています。この前も中学生とちよつと話す機会があつたのですが、「一年ちよつと経つてやつとこういう話ができます」と言っていました。本当にストレス状態というのはあります。悪くなつてしまうと医者に診せなければならぬような状況になつてしまいますが、最初のところでストレスに気付いてあげる、そういうところでボランティアの方々の協力を得てい

ます。話しを聞いていて、ちよつとこれは大変そうだなというときは、臨床心理士の方に引き継いで聞いてもらうようにする、そういう活動を行つてきました。

このスライドはわれわれが行つてきた「こころのケア」活動の一例です。石巻の避難所での活動ですが、看護奉仕団・麗人会赤十字奉仕団の方が、背中をさすつてあげたり、青年奉仕団の方は寄り添つてあげる、若い青年奉仕団の方は避難所にいる子どもさんたちと一緒に遊んであげる。避難所には遊ぶものもないので、遊び道具やボールを持つていつて一緒に遊ぶ。お絵かきもしています。こういう活動を続けています。

9月いっぱい石巻の避難所はほとんどなくなつたのですね。それで仮設住宅の生活になりましたので、それでこれまでの活動をなくしてしまふのかといったときに、仮設住宅に移つてもやれるということ、仮設住宅の場合は地域奉仕団の方々に協力をいただきながら行つています。全体からすると、仮設住宅の皆様方が集つて一人でも知り合いの方を増やしていつてコミュニティーができるよう、コミュニティー構築の支援をずつと行つています。

この写真はわれわれが8月11日に配つたチラシです。「赤十字の心と体のほつとケア」とタイトルが付いています。場所は、山王市営住宅地跡仮設住宅集会所になっています。集会所をまわるときは、その仮設住宅の一軒一軒に「こんにちは」と声をかけてこのチラシを配りました。リラクゼーションもやりますよ、健康相談もありますよと。「お茶会」と書いてありますが、赤十字と一緒にバーベキューを楽しみました。

ようよ、アイスクリームもかき氷もありますよと。

仮設住宅には必ず集会場があります。その集会場の中で看護奉仕団の方が、あるいは麗人会赤十字奉仕団の方が、何か特殊技能で仮設に住んでおられる対応する。それらが終わつたあと、住民の方がこの写真にあるように、炊き出しをしているテントに來られて、みなさんが集う。こういうコミュニティー構築の流れを続けています。

この写真は、麗人会赤十字奉仕団の方が集会所の中でマッサージをしておられるところです。お化粧なんかもしてあげておられます。久しぶりにお化粧したと言われ、そこからいろんな会話ができてきて、それを熱心に聞いてあげるとか。

みなさん、「たまごん」つてご存じですか。丸い形の白いこんにやくですが、これを湯通しして、あとは味付けをお願いしますと、この写真にあるように大きな鍋で煮ます。たまごんは山形などに行くとき割り箸に三つさして辛子を付けて食べます。だけど、われわれはそういう方法をとつておりません。なぜかという、そういう食べ方だと、ありがたうと言つて自分の部屋に持つていつて食べてしまうからです。それでこのように大きな鍋で煮て、どんぶりによそい、そこに集まつてきて食べる、そのようにしています。わいわいがやがや言いながら。

これは餅つきしているところです。こっちはたこ焼き、関西の皆さまは本当に上手ですね。あと、焼きそばとか、スイカ割りや。この絵は何かという、今までやつて來た炊き出しのメニューの内容です。これらはわれわれが勝手に決めていたのでなくて、仮設の皆さまと話しあつて、何

したいですかと聞いて決めています。あまり一方的な活動は良くないです。冬場の時期だったので餅つきをやりたいよと、「それでは杵と臼を持つて来ますので、餅をついてください」、「分かったよ、つくよ。」「たこ焼きやりたいんですが」、「いいですよ、準備します」。オリジナルのたこ焼き製造器を作って持っていきました。夏場はそうめん、そうめんも流しそうめんなのです。職員は考えました、竹を切つて現場に持っていくって流すの、といったときに、そこまではやれないでしょうということ、こういう家庭用の流しそうめん器があるので、それで机三つくらい並べて、「はい、流しそうめんです」と。楽しんでやる、これだと思いません。

先ほどお話ししたように、われわれがやるのではなくて、一緒にやってください。ですから、仮設にお住まいの方が一生懸命やられる。この写真にある、たこ焼きを一緒に作ってくれている中学生ですが、ここで材料を手渡しているのは奉仕団の方でなくて仮設にお住まいの方です。焼きそばを作るときに準備した材料が余ったので、それを仮設の方が自分たちで細かく切つて中学生に渡している。これはかき氷を作っているところですが、このかき氷器は昔からある機械です。

これはバーベキューですが、これなんかはみなさん言わなくても集まってきたいろいろ話してやっておられます。これはスイカ割りですが、この写真にある木刀は私の木刀です。小学生の頃福島に行きまして、このような木刀を買うのが定番なのです。うちには木刀が3本くらいあります。「木刀ですよ、うまくスイカを割ってくださいね」などと言って

やっています。このような活動は、われわれ考えているのは、当面平成25年の9月、仮設がなくなるまで、やれることをずっとやっていきたいと思います。

資金不足

次に資金不足のことをお話しします。この図は宮城県支部の状況です。一般社費、法人社費、寄付に分けて平成14年からの推移が書いてあります。平成23年度は目標額に対して、一般社費で50%でした。社費は、この図にあるように、平成23年度でどん落ちて寄付も下がっています。法人の寄付金だけがわずかに上がっています。これなぜかというと、エイザイという製薬会社さんが大口で寄付をくださったからです。こういう状況ですので、奉仕団の方にお渡しできる金額は当面あまり見込めないかなと思っています。

先ほど基礎研修会の助成の話もしましたが、それは団員の方の研修の助成なんです。例えば、どこかの祭りなどに参加して、赤十字とはどんな活動しているのかなど、外部に対し赤十字PR活動等の奨励事業実施については、宮城県支部の場合、上限9万5000円の助成金を別に奉仕団の方にお渡しすることになっています。この9万5000円を維持しながら、なんとか赤十字のPRを続けていって頂きたいなと思っています。しかし、資金不足もあって、この9万5000円からあげるのには難しいかなと思っています。

赤十字防災ボランティア

地域奉仕団の他に、赤十字防災ボランティアという活動がありまして、今回の震災にあたっては、昨年の3月14日に合同庁舎内の赤十字宮城県支部内に赤十字防災ボランティアセンターを設置しました。この防災ボランティアについては、本社の方で全国からのボランティアの調整をして宮城県に派遣して頂きました。全国31の都道府県支部から519名のボランティアが活動しました。主な活動場所は、亘理町、東松島市、多賀城市、気仙沼市、他8市4町で、活動延人数は2,178名にも及びました。

この表は赤十字防災ボランティアの月別活動者数（延数）ですが、一番多かったのは5月の907名、内訳は県内が54名、県外が853名でした。宮城県の防災ボランティアセンターは3月から6月末までの活動でした。累計で2,178名のボランティアが活動されました。活動場所のうち気仙沼市は、3月末に宮城県赤十字防災ボランティアセンターの支所となっていたので、700名という多くの方が活動されました。

いろんな県からボランティアの方が来られたのですが、長期に活動される方はかなりきつい仕事になります。ボランティアの方は自己完結という形できて頂いていますが、例えば、お風呂に入りたいということもありますので、そういう場合はセンターで調整することになります。ボランティアセンターの運営要員もかなり必要でした。

この赤十字防災ボランティアの問題としては、当支部に登録している防災ボランティアは56名と少なく、活動くださった方はわずか2名しかいなかったのです。二番目としては、先ほども言いましたが、災害が長期にわたる場合、防災ボランティアセンターの運営要員確保が非常に困難です。従って、宮城県支部の場合、登録するボランティアを増やしていくことが必須の条件で、登録されるボランティアの方が、実際の災害があつたときに、駆けつけて一緒に仕事をしてくださる方であればならないのですが、それをどういうふうにして選定するのか、それが難しいことです。だいたい、長くいてくださった方は、傾向を見ると、融通の利く自営業の方ですね。それ以外の方は、たとえば、会社にお勤めされている場合、4日も5日も休むのはとうてい無理です。その辺がボランティア活動するときの人員選定が難しくなる点です。

復興支援活動計画（平成24年度以降）

今年度以降の復興計画の中には、いままでお伝えした奉仕団の活動がすごくいっぱい出ていまして、奉仕団活動としては、この表にあるように、①少子高齢化社会に対応した地域高齢者福祉支援活動がまずあげられています。そのほか、②非常災害に対する救援・防災等の活動など、こういう奉仕団の奨励事業を積極的に行ってください、と奉仕団の皆さまにはお願いしているところです。

宮城県が復興するにあたって、本当に、奉仕団の方が各地で活動して

頂くことが復興に結びつくと思っておりますので、特殊奉仕団の方についても、各特殊技能を活かして、仮設住宅の方に対して奉仕団活動を行ってくださいと、計画の中に盛り込んでいます。

これは、今月の本社の新聞にも載りましたが、仮設住宅にお住まいの小学生に元気になってもらいたいということで、その皆さま方、100名くらいを対象にした事業だったのです。そういう子どもさんと一緒に、栗原の花山青少年自然の家でゲームをしたりして、元気を取り戻してもらおうという活動を行いました。

最後になりますが、「こころのケア」活動については、先ほどお伝えしたとおり月二回の活動ですが、これはこれからもずっとまだまだ続けて行かなくちゃいけないことで、当然のことですが、平成24年の活動に組み込まれます。

一応赤十字の奉仕団活動の現状をお話ししました。福井県支部と違うところもあるかと思いますが、自分なりにこれからどうしていかなければならぬかということについて真剣に考えて、それを今後活かしていくつもりです。赤十字の思いを皆さまに聞いていただいて、それを地域に伝えていくのかわれわれの使命だと思っております。これから何年も真剣にとり組んでいかなければならないことだと思っております。今までもたくさん協力をいただきましたが、これからも宮城県のことをずっと思ってくださいるような、そのようなことにどうか今後ともご協力お願い致します。ご清聴ありがとうございます(拍手)

講演後の質疑応答

早川 ありがとうございます。遠いところから来ていただいた甲斐があつたという気持ちで聞いていました。われわれにしてみれば、1年半になります。先ほどの話で今でもニュースの画面を見るのは嫌だといわれると聞くと、現地の方はまだまだ被災の中におられるのでないかと思いました。

義援金の配分

参加者 A ちよつと視線が違うのですが、震災のあとで義援金の配分が滞つたという報道がありました。日赤に対して行われた義援金に対して宮城県ではどうだったのか、その話をしていただけませんか。

井上 ご存じのようにある週刊誌であのように大きく取り上げられ、あれ！と思つたのですが、義援金は三千何百億で阪神の時の三倍以上で、まだまだ延長されています。今回の震災は、皆さまご存じのように、例えば、被害に遭われてどこに行っておられるのか分からない、あるいは被災の状況を確認する行政のマンパワーがない。そういう状況の中で、義援金の配分はかなりきつかったと思います。義援金は、例えば、日赤に届いても、それを配分するのはあくまでも市町村です。受付管理ということについては、日本赤十字社の各支部に集まったお金は本社に流れそこで管理されます。市町村でこれだけの被害があつたので、

宮城県ではこれだけ必要ですとなると、宮城県支部が本社に請求をかける。そこで初めて日赤が宮城県に送金する。こういう流れですので、申し訳ないのですが、こういう流れはなかなか変えられないですね。

参加者 A お金はまだ残っているということですか。

井上 額は少ないと思いますが残っていると思います。というのは、受付はまだ続いているので、その分があると思います。日赤で受け付けた分はほぼ市町村に配分されています。他の団体と違って、日赤では義援金に関する事務経費は全くないので、義援金は被災された方に全て渡ります。

震災時の救護活動

参加者 B 今回の講演会でいろいろなことを教えていただきましたありがとうございます。ちよつとイメージが違っていきまして、大災害が発生した後の救護活動には携わっておられなかったのですか。

井上 大災害での救護活動ですね。救護活動については、先ほど少しお話ししましたが、石巻の医療圏で救護活動は展開されていました。そういう体制になるにはある程度の時間を要するのですが、災害が発生したときには各支部が独自に判断して乗り込んでいきます。例えば、3月12日の未明ぐらいには、埼玉の救護班が独自の判断で宮城県に入っています。そのときに活動しているのは、情報が入っていないこともあって、白石市の公民館とか、神奈川の救護班の場合は亘理とか、散ら

ばつて活動していました。県の災害対策本部の方で、石巻の被害が非常に大きいので赤十字はそこをとりまとめるように活動してくれ、ということ、宮城県の場合、赤十字の八百何チームが医療チームとして活動しました。その活動が9月の中旬まで続きました。

トリアージ

参加者 B 最近、災害の日になんで防災訓練などをしたのですが、そのとき、トリアージのことを聞いたのですが、そういう考え方は最近導入されたのですか。

(注：トリアージとは、人材・資源の制約の著しい災害医療において、最善の救命効果を得るために、多数の傷病者を重症度と緊急性によって分別し、治療の優先度を決定すること。(ウイキペディアより引用))

井上 赤十字の場合ですと、トリアージという考え方はかなり前から持っていました。命を救うというときにはどうしてもそういう考え方が必要なのですね。トリアージとは何かというと、救える人を多数救おうということですが、例えばドクターがお亡くなりになったと判断した方にはもう手当をする必要はないのです。トリアージという考え方は、ますます一般の方々に知っていただきたい知識です。われわれの訓練の時にはどうしても必要な内容です。もつともつと進められていくて欲しいと思っています。

特殊奉仕団

参加者C 先ほどのスライドの中に特殊奉仕団の中に芸能奉仕団とあったのですが、これは何を指すのですか。

井上 芸能奉仕団というのは、その地域の老人ホームとかそういう場所に行つて、踊ったりするのです。昨年、自分も初めて奉仕団長の会合に出席したときに、「一緒にやるから舞台上がって」と言われて上がったら、「俺の言う通りにしなさい」と言われたので、「はい」と言うところでは、パンツ一丁で踊りなさい」と言われた(笑)。それで踊ったということがありました。いろんな楽しい服装を着けて仮装して楽しく踊る。こういう種類の奉仕団は各地にあるのではないのでしょうか。

参加者C そういう奉仕団として行かれる方がいるのなら、僕も行きたいなと思います。そういう慰問はしたことがこれまでありますが、奉仕団としてそのようなものがあるのは初めて知りました。

宮城県災害医療コーディネータの石井先生

早川 石巻の赤十字病院が元の場所なら津波に遭っていたら、という話がありました。それは津波を想定して移動した方がいいという判断で移転したのですか。

井上 移転の時は津波の想定は実はしてなくて、病院の老朽化が一番でしたので、本当にそういうこともあるのかなという感じなんです。

津波の想定はしていなかったですね、現に看護学校は元の位置にありましたので、建物はすべてなくなりました。

早川 移転したのは津波の何年前なのでしょうか。

井上 5年間ですね。

井上 メディアでごらんになったかも知れませんが石井先生のご存じですか。石巻赤十字病院で指揮を執られた先生です。実は、この震災の前の2月に宮城県の災害医療コーディネータという役を県知事から委嘱されていたのです。災害医療コーディネータの委嘱を受けて、県の方から指示を受けることになったのです。そうでなければ、通常、われわれの救護医療活動というのは、行政から独立動くということはないのです。今回の場合、赤十字だけだと800ほどだったのですが、全国から集まった救護班は大量だったのです。そういうのをまとめる役として石井先生がいたのです。石井先生は、今私が着ているような赤十字のマークの入ったユニフォームを着ていないのです。こういう位置、つまり赤十字の一員として指示を出しているのではなく、自分は災害医療コーディネータとしてここをとりまとめている、という立場でやられた。赤十字のマークの付いたのを着てやっていると、「どうしてあなたがそういうことをやっているのですか」になってしまうのです。今、自分は県から委嘱されたコーディネータとしてやっている、それで全体を指揮しているのだよ、ということ。これがいままでになかったことでした。

今回の災害の規模はすごかったもので、これが日赤の活動の指標になるかどうかはちよつと分かりません。今までの救護体制では考えられない

い、そこまでの体制は考えていなかったもので、今後どうなるかは言えないところはありますが、ただ、いまのところ、これほど大規模になった医療活動を日赤としてどうやっていけばいいのかについては、日赤内部で議論しています。非常に難しい課題です。

早川 今の石井先生の話がありました。日本中からいろんなチームが行ったと思いますが、それをとりまとめて効率よく回すことは大変なことだと思います。個人の能力は当然ですが、どういうふうにすればうまくいくと思われませんか。

井上 さっきの石巻医療圏という地域、22万人の場所ですが、あそこが15エリアに別れていたのです。そういう風にしたのです。石井先生はたとえば、福井県のチームがやって来たとする、ここを担当してくださいと、そういう指示を出されるのです。それがエリアライン制といわれるもので、どういうことかという、福井県の大学の医療チームがやって来てこのエリアを担当して、3日間か4日間活動して業務を終えて帰ると次に来た福井県のチームにも同じエリアの医療救護をお願いする、つまりメインの柱をひとつの県にお願いする。同様に、たとえば、この11のエリアは京都に担当いただく、というふうに。エリア内のことは各県で調整していただく。これだけの規模のものになれば、エリアを決めて医療救護を行っていくということは、かなり有効だったのでないかと思っています。大きな災害が起こったときは、体制とすると、このような石井先生の方法を赤十字としてノウハウとして入れておかなければならないかと考えています。

早川 そうすると、徹底的に中央集権的でなくてある程度任せる、極端に言えば、それぞれのグループは独立に走ればいいということでしょうか。

井上 石井先生は任せつきりというよりは、全体の流れとしてはこういう決まりがあるので守って欲しい、あとは、そこで活動するにあたっての留意事項とか引き継ぎ事項とかは県の皆さままで周知して頑張ってください。そういう活動でした。なんでもかんでも皆様方の自由です、ではなかった。

日赤の奉仕団

参加者D 日赤の奉仕団というのは、今の話しを聞いていて、地域奉仕団の活動なのかなと思いました。お話を聞いていろいろな形の奉仕団があることを知りました。災害時に、一般のボランティアがたくさん入られた時、社会福祉協議会がそれらボランティアをとりまとめる組織だと思のですが、日赤のボランティアとはどんなふうな調整になるのかということと、それから、赤十字奉仕団というのは赤十字の活動の中に団員さんとかがおられて、訓練されたり研修を受けたりしておられるのを聞いたりしていますが、そういう奉仕団員ではない人はどういうふうになるのかなど。日赤の方に参加されたから日赤奉仕団なのか、全体の調整のことがよく分からなかったのです。

井上 そこはちょっと難しいところですね。ひとつ言えるのは、赤十字奉

仕団というのは登録制なのです。4年に一度の登録作業があります。そちらの奉仕団は何名いらつしやいますか、どのような方ですか、というふうにして、登録します。住所も書きます。そういうふうに登録された方が赤十字奉仕団です。奉仕団活動という観点から言うと、共同作業ということから言えば、まったく同じことだと思っています。社協さんの力を借りなければできないことはたくさんあります。日赤とすると、日赤のユニホームを着て活動して欲しいということは、たしかにあります。そうすると社協さんとうまくいくかどうかという問題もあります。そこが難しいところです。

先ほど日赤の活動として9000余名の方が活動されたと話しましたが、あの方々が全て日赤のマークを付けて活動していたかということとそこまでは調べていないので分かりません。自分は奉仕団の登録をしていて活動しました、という方の人数です。

山本 福井県の場合についてお話しします。これは他の府県が参考になっているですね。福井県の場合は官民一体でやっています、福井方式と言われているので知っておられる方もいらつしやるかと思えます。三國の重油流出事故以来、県が災害ボランティアセンターを作っているのです。そこに日赤はじめいろんなボランティアグループが登録しているのです。事務局的なことは社協にやつてもらっています。たとえばここで災害があつたとすると、おおい町の社協が窓口になり、そこに登録してもらおうようになります。日赤の奉仕団が、たとえば炊き出しをしたとか、そういうことがあるのなら、この窓口に言うのです。そこです

解をもらつて活動します。このボランティアセンターに申し込んでいろいろやることになります。

現地におけるこころのケア

早川 こころのケアの話がありました。とても大変な仕事かなと思いましたが。専門的な知識はなくてもできる範囲でやればいいということ、難しくなつた場合は専門の方にお願ひすればいいと聞きました。私、向こうで聞いたことは、亡くなられた方がどなたなのか、それを区長さんが見てやらなければいけないと。そのときの区長さんは、「僕もなんどもやりました」といわれました。それに耐えられなくておかしなつたというようなことも新聞で読みました。それでお訊きたいのは、普通の人が心のケアに関わつたばかりに、その人がへんになつたとかいうようなことはなかつたのでしょうか。

井上 一番最初活動するときには、そういう危惧が実はあつたのです。われわれ奉仕団の皆様方と一緒に行って、奉仕団の方々が大変な状況になることはないだろうかねと思っていました。実際最初の頃は、東京の日赤の医療センターからこころのケアの専門家の丸山先生に来ていただいて、昨年6月頃(2011年6月)に研修会を実施し、研修を受けていただいた奉仕団員とともに「こころのケア活動」を行いました。研修会ではこころのケアとはどういうことだろうか、ストレス反応とはどういうことだろうか、ということから始めて、そういう知識を持つて一

緒に行ったのです。

わたしもそれに参加させていただいたのですが、難しいことかと思っただのですが、丸山先生は研修ではそれほど難しいシーンはなくて、まあとにかく聞いてあげること、しかし、「あまり熱心に入りすぎずにくれ」と、受講された方にはおっしゃっておられました。ちょっと難しいと思ったら看護師の方に任すように、あとは安全に帰ってくれば90点だといわれていました。質問にあつたように、あまり入り込みすぎると自分も辛くなると、そのときの研修にはありませんでした。

その研修を受けた方はものすごく多い人数ではなかったのですが、実際にやってみても、それほど難しいことには発展しませんでした。ですから、研修会を受けず、今、そのへんの知識がない奉仕団の皆さまと行っています。知識はなくても対応している、ということですよ。

早川 そうすると、行って一緒におればいいというようなことで、たとえば聴き方がいい加減だから困るといふようなことはなかったのですか。

井上 実際に行ってそこで聞く内容というのは、特別なことでないので。たとえば、仮設にお住まいの方が震災の時はどうだったとかで、あまり難しい話にはならないのです。そういう話はあまり言いたがらないのです。そこまでなくケースはほとんどないです。私が行っているかぎりほぼなかったです。

今回の震災でのトリアージ

参加者 A 先ほどトリアージの話が出ましたが、トリアージをするのは医師に限られているのか、あるいは医療知識のある看護婦さんでもいいのか、実際、今回の場合そういう人もトリアージを行ったのか。だれがトリアージを行ったのか、それをお訊きします。

井上 トリアージの仕方としては、死亡の診断は医師しかできませんので、病院にどこかか入って来た場合、軽傷の方のトリアージは主事や看護師で行えます。それなりの、要は、生死を分けるような場合はドクターが行うものですが、今回の石巻の場合、外に避難所的なものを作つてそこでトリアージについては、歩いてこられた方には看護師が対応するようになります。

参加者 A 私は立ち会つたわけではありませんが、重傷の方がどつと来た場合、本人が俺が先だとはいえないと思いますが、身内の人に関係者がいたら、あなたは一番だとか三番だとかになったときに、それをどういう順にするのか、医者であつてもなかなか辛いと思うのですが。日本ではあまり経験されていないことではないかと思ひます。今回の場合、そういうことはあまり問題なくいったのかどうか、お訊きします。

井上 石巻赤十字病院についていえば、相当訓練を積んだ病院でしたので、なにせ病院の建物自体がそれを想定した建物でして、フロアーを入つたときに一階の正面がすごく広くて、そこにトリアージエリアを作れるような広い部屋になっていて、災害が起つたらすぐにそういう体

制が取れるような訓練をした方々だったので、また、病院の前も広かったので、病院の前でいったんトリアージをして、軽傷の方は中に入れないようにしました。そういう病院だったのでトリアージからいえば、とてもスムーズにいった病院でした。訓練のたまものだと思いますし、やっていなければできないと思います。

今回石巻でなげうまくいったのかについていえば、一人ひとりの災害対応が決まっていたことがあります。マニュアルにも一人ひとり何をやるのか、名前入りで決まっていた。普通、マニュアルには名前を入れるところまではあまりしなくていいですね。どこどこ課のなにに担当はこれをするとか。一人ひとりが自分が何をすべきかを理解していたので、うまくいったと思います。

赤十字のマーク

参加者C 今着ておられる服にマークが入っていますが、赤十字のマークの隣にお月さんなのかCなのか。一般の方が見れば、ああこの人は赤十字の方かなと、それと赤十字の方がこのマークを見れば、これはどんな関係の方かなと分かるようになっていたのですか。

井上 この服を着ていれば赤十字関係者であることは分かると思うのですが、奉仕団の方かもしれません。このCのようなマークはご存じですね。これは赤新月について、イスラム教の国では十字のマークを嫌うので、このマークも赤十字のマークとして認められているのです。赤十字

赤新月社として。あとひとつ、レッドクリスタルといって赤水晶も赤十字のマークとして認められています。

奉仕団として活動するときには、この赤十字マークを付けることになりませんが、このマークはすごく重みがあつて保護されるマークで、一般の人には給油してくれなくても、このマークを付けていくと「ああ赤十字なのか」といわれて、入れてもらった方が宮城県でもたくさん聞かれています。赤十字マークの重みを活動するときには理解いただきながら、一緒に活動していただければありがたいなと思っています。

今回の奉仕団の対応で、日赤がちよつと古くさいと思うことがありました。奉仕団活動をしてください、労力もお願ひします、頑張ってくださいというの、この頃はなかなか難しいと思うのです。私が改善しようとしていることは、資金がない中で災害が発生した時に、たとえば炊き出し、何百人の避難のひとに対してわれわれは頑張るのだ、というときに、材料費くらいは支部でもつて出せるくらいの赤十字活動でなければ、おかしと思うのです。このことについては、今年度か来年度に改正して今後の災害にそなえるようにしなければと思っています。

奉仕団という、お米でも野菜でも、独自にいろんな方々がどこかどかどか来るようなイメージが、そういう古くさいイメージが残っている想定があるとした、私に思えないのです。それもあつていいとは思いますが、しかし、実際、何百人が避難所にいるとき、それをすべて奉仕団任せというのはちよつと無理のある想定だと思うのです。

日赤の奉仕団活動と民間のボランティア活動

参加者E 今そのお話をお聞きして、阪神大震災から若者がボランティアに参加するということが増えてきて、そういう流れになっているけれど、日赤の奉仕団というのは、イメージ的にはなんか堅い感じがある中で、すごくたくさんのボランティアがそういうところに参加する場合、あるひとりの人が日赤の奉仕団に登録されていても別の形で参加されることが多いのではないかと思うのです。日赤の奉仕団は民間のボランティアに比べて動きづらい感じがあるのではないかと。

井上 それはあるかも知れませんが。民間の動きはめちゃくちゃ速いですし、その速さのうちがどう対抗していくのかといわれると、難しいところがあります。赤十字の地域奉仕団の方は高齢の方が多いので、災害ボランティアに関われるかという点、ちよつと無理がある。災害のボランティア活動ということについては、社協さんで受け入れるボランティアどこに何名行くかなどについては、社協さんで受け入れるボランティアの数からいっても、社協さんのほうがよほどうまく行きますね。一緒にタイアップしながら行うのも良い方法だと思います。ただ、赤十字の奉仕団にも災害に携わるボランティアがいるのだよ、という意味では宮城県もそれに乗っているとは思っています。

参加者F 名田庄の地域奉仕団のひとりです。私も入ったとき、地域の方から次ぎお願いねといわれて入ったのですけれど、このような大きな災害があったとき。奉仕団は重要な役割を持っているのだと始めて

認識できました。奉仕団に入つて総会に出て、はい日赤の奉仕団です、だけでは重みが分らないです。今回、どこの地域でもそうだと思いますが、震災で学んだことを少しでも活かすことが大切なのだと感じています。いままであった震災や災害はどこか他人事というか、自分とは関係ないことで起こっていることと捉えていたのですが、今回の震災はいつ何時自分の身に降りかかるか分からない、だから自分ができるところは普段から考えておかなければいけないという立場に立つて、動けることは何だろうという意識を持つことが大事なのだと思います。

たくさんの方が犠牲になられた中で私たちが学ぶべきことは、たくさんあると思います。私たちも少し意識を高めて、日赤奉仕団というのはどういふものなのか、もう少し理解するとかしなればと思います。最初の総会の時に県の方もおられました。奉仕団とはこういうことですと少し言ってもらえれば、地域で推薦されていやいやながら入った方もいらつしやると思うのですが、質がより高められるのではないかと感じました。

これは全然関係ない話ですが、真っ白のエプロン、あれは日赤のユニフォームではないのですか。あれとぶかぶかのジャージでは「やろうー」という気が爆笑。改善していくといいかなと思います。すこしでも若いひとが入りやすいような改善が必要でないかなと思います。

山本 委員長さんの会議が年2回ありまして、いつもそのときにお願しているのです。いろんな地域の奉仕団の会議があるのですが、そこに私どもを呼んでくださいとお願いしているのです。小浜の総会に呼ばれ

たことがあるのです。そこで赤十字奉仕団の話とか東日本大震災の話とかしました。そこで赤十字奉仕団の役割についても説明させてもらいました。ここ名田庄でも是非呼んでいただきたいのです。夜でも日曜日でも土曜日でもかまいません。今おっしゃったようなことを是非おしゃってほしいのです。それとユニホームですが、三国の重油流出事故の時に、三国に参りましたらおにぎりの炊き出しをされていたのです。それで他の地域の方も私たちもやりたいということで、日赤福井支部で予算を組んでみんな交代交代でやっていたのです。百万円の予算が一ヶ月でなくなりまして、このあとどうしようかと委員長さんたちに訊ねたところ、全国から多くのボランティアが来ているのに途中で止めるわけにはいかない。材料は自分たちで持ち寄ってもやりたいということ、今日は勝山の奉仕団、明日は大野の奉仕団がやりますよと、いろいろやっていたのです。この名田庄で災害、たとえば山崩れがあったとします。炊き出しは奉仕団で是非やっていたきたいことなので、必要なもの、お米とか釜とかその他食材など全部こちらから持っていくのです。こちらから持つていく釜は一度に700人分のお米を炊くことができます。

トリアージについて

先ほどトリアージの話がありましたのでひとつだけ付け加えます。トリアージは今までは救護所で、この方は重傷だとか、取り上げてきたの

ですが、阪神大震災の時、私もその日のうちに行きましたが、避難所に大勢の方が押し寄せてくるのです。速くやってくれ、と口やかましくいいのです。口やかましく言う人は診なくてもいいのです(爆笑)。なにも言えない人がいらつしやるのですね、そういう人を先に見なければいけない、というのがトリアージのひとつです。

いろんな地域に行ってお願ひしているのは、トリアージは是非やってくださいとお願ひしてるのです。どんなことをするかというと、先ほどもいいましたように、歩いてこられた方と歩けない方を分けてほしいのです。私たちが行ったとき、はい、どの人から診ましょうねと探していたのでは時間がかかってしまうので、皆さまができることで、簡単なことなので、歩ける人と歩けない人とを分けるだけでいいのです。これもトリアージのひとつです。全く知らないものが行って分けるよりは、地域の方を知っておられる方がそのようにあらかじめ分けておいていただけると助かるのです。わしが先だと言う人をひとまず押さえておいて欲しいのです(笑)。そこで寝ていてくださいねと、全然動けない人はちよつと待つていてねと。

井上 委員長さんが集まった会議でグループワークを行いました。今までそんなことしたことはなかったです、といわれた。奉仕団活動を広めるためにどうしたらいいのでしょうかということは話題にはしましたが、それって二の次なのです。知り合いの方をひとりでも多く作っていたらいい、なにかあったときに、うち人数が少なくて手が回らないので手伝いに来てよ、というような関係をちよつとでも作れるようにということ

が一番の目的でグループワークを行いました。あとは、委員長さんの連絡網を整理して、それを一人ひとりにバックして何かあったときに助けに来てよと言えるような体制をこーい、二年で整えて行きたいと思っています。賛同いただいた方は連絡先を出してくださいとお願ひしたら、かなりの方から出していただきました。地元だけだと狭いので地域のつながりが大切だと思っています。

早川 赤十字とは直接関係ないかも知れませんが、宮城県から来てもらったのでお訊きしたいことがあります。今年の夏、石巻から女川に行つて現地を見せてもらったのですが、瓦礫が、特に女川がひどかったのですが、あれほどの瓦礫が県内で処理できるのかどうか、そのことについて聞かせて欲しいと思っています。放射能のことで毛嫌いしている人もいますが、あれをみすぐすのはけしからんという感じがものすごくするので、そのことについて聞かせて下さい。

井上 瓦礫の処理に関しては知識は乏しいのですが、まだまだ残っている感じですが。福岡市で受け入れると聞いているのですが、それ以外のところではあまり聞いていないので、多分あのままの状況が続くのではないかと思います。復興ということからいうと、ほど遠いです。多分一年前と変わっていないです。

山本 トリアージについて少し付けさせてください。今回の東日本大震災で今日ご活動に携わり、これまでの日赤のトリアージの考え方で良かったのかと考えさせられました。赤十字のトリアージは公平を原則にしています。平等ではありません。公平と平等の違いは、たとえば、

こういうことになります。ここにリングが10個あり、子どもが4人いるとします。2個半ずつ分けるのが平等です。赤十字という公平というのは、この子に今たくさん食べさせないと亡くなってしまうというようなときには、その子に3つも4つも与えて元気な子には今回は半分で我慢してよと。災害現場においても、どの人を最初にやらなければならぬか、どういう順序でやるか決めるのが、赤十字の公平なのです。私も、これまでトリアージに関していろんな訓練をしましたが、今回の災害は、赤十字のトリアージの原則である公平が本当にこれでいいのかということがありました。

たとえば、船に乗っていて波が来て乗っていた方が海に投げ出されたとします。4人が投げ出されたとします。ひとりには殺人者、ひとりには子ども、ひとりには友人、もう一人は高齢者として。これら4人のひとのうち、誰から助け出すのがいいでしょうか。殺人者、子ども、友人、高齢者となると皆さまはどうされますか。

(会場から「子ども」、・・・「友人」・・・)

(会場から「救助に行つた船に一番近い人」)

山本 赤十字の場合は、殺人者、子ども、友人、高齢者となった場合、公平の原則から、どの人が先におぼれてしまうか、その人を最初に救つていたのです。しかしながら、今回の震災の場合、親鸞上人の言葉と同じなのですが、津波があつたときにどの人から救いますかとなったときに、親鸞聖人さんは目の前の人から救いますよといわれた。赤十字のいままでの公平の原則を考えると、おぼれてしまうのは誰かとな

るのですが、もう目の前から救わなければならない。そういうことをやっていかなければだめだったのが今回の災害だったのです。

だから赤十字のトリアージからしますと、ほんとに、どの人が先におぼれてしまうのか、そんなことは考えられるのかなということを考えさせられたのが今回の災害でした。トリアージはすべてがオツケーでない。そのことを付け加えさせて下さい。

早川 だんだん時間が迫ってきましたが、どなたか他に質問はありませんか。

仮設住宅での自治会活動

参加者 G 先ほど復興に関しては一年前と変わっていないという話がありました。日赤が仮設住宅でするイベントのことですが、いまの仮設住宅の状況というのは、日赤が手助けしてそういうイベントを開かないと住んでいる人たちだけではできないということでしょうか。

井上 仮設にお住まいの方は元気になつていて自分たちで何かやろうとはなっています。問題なのは、自治会組織がどこでもうまくいっていないことですね。仮設に住んでいても集団生活であることにかわりはないのです。いろんな地域から来た方もいますし、環境が違うことで生活の違いもあります。そういう中で中心になる方はすごく疲れる作業になると思っています。多分、そういう役員の方は変わっていると思います。あまりに大変で疲れてしまって。住んでいる方よりも自治会組織を運

営していくの方が大変な状況だと思います。これは今後も続くと思えます。

参加者 G そういう部分に日赤が関与していく……

井上 自治会組織にわれわれが口出しすることはやってはいないですが、そういう方からいろんな話を聞きます。しかし、こういう方がいのでないかと、そんなことはしていません。

早川 時間になりましたのでこれで終了とします。今日は遠方から来ていただきまして、本当にいい話をたくさん聞くことができました。とてもいい機会でした。ここから感謝申し上げます。拍手でお礼したいと思います(大きな拍手)。

資料

一・参加者(13名)

川口きみこ、治部ひろみ、下西孝明、坪内彰、坪川博之、
堂前裕美子、中野英二、早川博信、早川眞理子、福本人司、
森本小夜美、山口孝史、山本裕之(日赤福井県支部)

二・発言者(6名)

A(60代、男性)、B(50代、男性)、C(50代、男性)、
D(50代、女性)、E(50代、女性)、F(50代、女性)